



これから のPTA ——自主性を引き出す 団体にするために

そもそも、PTAは
何のために存在するの？

母親たちの間で、しばしばため息まじりに語られるPTA。我々が子どものころからあるおなじみの団体ですが、そもそも一体、何のために存在するのでしょうか？

PTAとは、Parent Teacher Associationの略称です。その名の通り「学校（先生）と保護者（親）が協力し合って、子どもの学ぶ環境を良くするために存在する」というのが、多くの人の共通認識でしょう。

具体的にどんな協力をするのかというと、よくあるのは「保護者が学校周りのお手伝いをする」というもの。日本の学校は「子どもたちに勉強を教える」というメインの活動のほか、給食や学校行事など様々な周辺事業を抱えており、それらの部分でPTAが保護者の手伝いの供給をサポート

することは多いのです。例えば運動会や卒業式などの手伝い、保護者向けの給食試食会の運営、子どもたちが使う給食割烹着の修繕など、先生の仕事とも言い難いところを助けています。

よく、欧米などのPTAに該当する組織は「学校運営上の様々な問題について、保護者と学校が情報共有・意見交換をする場として機能している」と聞きますが、日本のPTAにはそういった機能は現状あまりありません。情報共有や意見交換は、管理職の先生（校長・教頭）とPTA会長（一部役員）の間でのみ行われ、一般のPTA会員は残念ながらほぼ無関係です。

他方で、PTAには「保護者が学び合う場」という側面もあり、講習会や講演会もよく行われています。文部科学省や教育委員会はPTAを「社会教育関係団体」として位置付けていますが、これには、保護者による過剰な学校奉仕や、保護者の奉仕に

対して学校が抱く過剰な期待に、釘を刺す意図もあるのかもしれませんが。

以上は、主に運営する側―学校管理職の先生や役員の保護者―から見たPTAの存在目的ですが、活動に参加する一般保護者（母親）の実感は、また大分異なるように思います。母親たちにとつてのPTAは、「保護者同士の横のつながりをつくる場（あるいは組み入れられる場）」という面が大きいでしょう。そのためにPTAができたわけではないものの、「PTAをやってみて良かった」と感じる人が多いのが、この部分です。委員や係を1回やる程度では、あまりつながりはできませんが、部長（委員長）や役員としてある程度深くかわると人的ネットワークが広がります。私自身もPTA活動のなかで、そこは良かったなと感じた点です。現実にはそういった側面がPTAを存続させてきた部分も、少なからずあるように思います。



大塚 玲子

PTAジャーナリスト

【おつか・れいこ】

「PTA」や「いろんな家族」を主なテーマに取材・執筆、講演を行う。著書は『PTAをけっこうラクにたのしくする本』『PTAがやっぱりコワイ人のための本』『オトナ婚です、わたしたち』（いずれも太郎次郎社エディタス）。オフィシャルサイト ohjimsho.com



なぜそんなに嫌がられるのか？

このように、PTAは本来、決して悪いものではないはずなのですが、どうしても嫌われているのでしょうか。

一番の原因は、強制的にやらせてしまうから、ということだと思います。

PTAは、会員（保護者）が子どもの卒業とともにどんどん入れ替わるため、何のためにPTAがあるのか、またそれぞれの

活動を何のためにやっているのかという目的が伝わらず、形だけが踏襲されがちです。すると「前年通りにやる」ことや、「全員が必ずやること」が、本来の目的に取って代わってしまうのです。

強制が強まってきた背景には、会員である保護者の状況変化という要因もあるでしょう。子どもの数とともに保護者の数も減り、同時に共稼ぎやひとり親世帯が増え、我々が子どものころにPTA活動を中心的に担っていたような「余力のある専業主婦」はとてまもなくなくなりました。それなのにPTAの仕事量は昔と変わらないか、あるいは増加しています。それをそのまままわそうとするため、「みんなで薄く広く負担しましょう」という音頭が取られ、強制力が高まってきたのでしょう。

PTAへの加入や会費徴収も、多くの場合、強制的に行われてきました。これは戦後すぐ日本にPTAが導入された時点から続く慣習ですが、そもそも多くの学校・PTAは各保護者に「PTAに入るか否か」という意思確認をしません。子どもが学校に入ると自動・強制的に保護者をPTAに加入させ（学校名簿がPTAに無断提供されることで実現）、かつ会費も強制的に徴収してしまうのです。これは残念ながら、違法と言わざるを得ない行為です。

現状のPTAはこのように、会員の意思を尊重しないことが多いため、嫌われてしまうのはやむを得ないように思います。

強制的3つの弊害

実際のところ、「強制」に頼るPTA運営は、様々な弊害を引き起こしています。主なものは、以下の3つです。

① より嫌われる負のスパイラル

強制して嫌われてしまうと、さらにやる人がいなくなり、そのために強制もさらに強化されるという、負のスパイラルに入ってしまうのです。

これは大変不毛な状況です。強制を強めれば強めるほど、問題解決からは、いよいよ遠のいてしまうのです。

② 辛い状況の人がより追い詰められる

保護者のなかには、いろんな状況の人がいます。ひとり親でトリプルワークをしている人、自分やパートナーが闘病中の人、介護中の人、赤ちゃんがいる人など、余力がない人も大勢います。ところが、そういった事情がある人も、見た目では分からないため、PTAの仕事や会費の徴収を強制され、より追い詰められています。

なかには「できない理由」を開示した人にも、活動や会費を「免除」できる制度を設けているPTAもありますが、そもそもPTAは入りたい人が入り、活動したい人が活動するものです。参加しないために、病歴や家族構成を他人に明かす必要は本来皆無です。それらを開示させることは、個人情報の保護という観点から見ても

も、非常に問題があります。

③ 本当の問題が先送りされる

P T Aでは、イベントや作業の人手が足りない時、「では〇〇委員さんに出てもらいましょう」などといって、強制で人を動員することがよくあります。しかし本来そこで必要なのは、「なぜ人が集まらないのか」「他に方法はないのか」「本当に必要な仕事か」などを考えることでしょう。それを強制動員で取り繕ってしまうと、根本的な問題はいつになっても改善されず、翌年以降もまた、強制に頼り続けることになってしまいます。

やりたい人でやるP T Aも可能はず

現状のP T Aは、こういった強制的なやり方から抜け出せなくなっていることが多いのですが、そうじゃないやり方だって、本当はあるのです。一般の団体のように、やりたい人がやる形で活動することは、可能はずです。

そのためにはまず、「P T Aはこういうもの」という、私たちの思い込みを捨てるのが大事でしょう。

先ほど説明した通り、いまのP T Aは、抱えている仕事に対して、やれる人・やりたい人が少ないため、やりたくない人・できない人にも活動を強制してしまっています。それをやめるには、まずは強制加入をやめて加入意思を確認するようにし、かつ「や

りたいと思う人でやれる分量まで、仕事を減らす」必要があるでしょう。

実際にここ数年間で、事業内容を見直し、スリム化するP T Aが大幅増加してきました。やり方は大きく分けて2通りあります。

① 仕事そのものを減らす

ひとつは「仕事そのものを減らす」という方法です。例えば、会員全員にアンケートをとるのもいいでしょう。すると「みんなが内心いらなそうと思っていた仕事」が浮かび上がってくるので、そういったものからカットするのです。実際にこの方法で事業を減らしたというP T Aの事例は、いくつか聞いています。

アンケートが行われない場合、一般会員はどうすればいいでしょうか。自分から役員さんに連絡を取り、要望を伝えるのもいいでしょう。役員の人も、誰かから声が上がるのを待っているかもしれません。

私も2年前に卒対（卒業式等に関する庶務）をやった時、それまで毎年やってきた仕事のいくつかをやめたり、やり方を変えたりしたのですが、そのほとんどは他の保護者から要望を受けたことでした。何かを変える時は、周囲から「勝手なことをして」と非難されやすいものですが、その点他の人から言われたことは、比較的改变やすいと感じました。

せっかく声をあげても、役員さんや校長先生の同意が得られず、変わらないことも

あるでしょうが、でも黙っているよりは、ずっといいはず。何年か後に、他の保護者が代わりに実現してくれるかもしれませんし、何より子どもたちに「人任せ」ではない大人の姿を見せることができます。

② やり方を工夫する

P T Aの仕事をスリム化するもうひとつの方法は、「やり方を工夫する」というものです。仕事そのものは継続するものの、方法を改善することで、仕事量を圧縮するのです。

例えば連絡方法なら、LINEやメールを使って、実際に集まる回数を減らすのもいいでしょう。ただしオンラインだけではトラブルも起きやすいので、時には電話や会議も取り入れ、その都度ベストな方法を選ぶのもポイントです。会議を長引かせないためには、最初に終了時間を宣言しておく、と、話の脱線を防ぐことができます。みんなで集まらなくてもできる作業は、各自都合のいい時間に家でできるようにするのもいいでしょう。

こうした仕事を減らすための工夫は、考え出すと意外とたくさん見つかりますし、いろいろ試してみるの楽しいものです。

楽しく参加しやすくする

仕事を減らすのと同時に、なるべく多くの人に参加しやすくすることも大事でしょう。これまでのように「無理やりやらせ



る」のではなく、「自分からやりたがる人が増えるように工夫する」のです。一般のボランティア団体は、みんなそういう努力をしています。なぜなら、PTA以外の団体は、そもそも強制などできないからです。

例えば、現状のPTAでは、いつ活動するのか不明なまま人を募集する（委員決めを行う）ことが多いですが、先に日時を提示してから人を募集すれば、多くの人が参加しやすくなります。また選択肢を増やせると、なお良いでしょう。平日の日中、平

日の夜、土曜日の午前中などのチョイスがあれば、様々な勤務パターンの人が出てきやすくなります。

「楽しくやる」ことも、とても大切です。先述した通り、PTAは仕事としてお金をもらってやる活動ではないため、「やって楽しい」と思えるものでなければ、みんなやりたがらないのが当然です。

人気のない活動はやめるか、もしくは魅力を加える工夫を検討してはどうでしょう。鬼ごっこ大会など、親子で参加できるイベントをPTAで企画して、みんなに喜ばれたといった事例もよく聞きます。

「楽しい」と思っている、ということも重要です。そのためには、「PTAに楽しいもの」という前提で仕組みを再構築する必要もあるでしょう。よく「ポイント制」や「免除制度」など、「PTAにみんなが嫌がってやりたがらないもの」という前提で設計された制度を見かけますが、逆効果を生んでしまいます。そんな制度があると、自分から「やりたい」という人は変人扱いされ、ますますみんな自主的にやりにくくなってしまうのです。

地域での子育てサポートも可能

強制的なやり方をやめることさえできるなら、PTAは良い可能性をたくさん秘めた団体だと思います。多種多様な地域住民をつなぐハブ（拠点）として、様々な展開

が期待できるでしょう。

実際に、こんな例もあります。2016年に開校した愛知県豊田市立浄水中学校の「PTCA」は、強制ではなく、やりたい人によってもらう形で運営しており、会費はありません。PTCAの「C」はCommunityを意味し、保護者だけでなく、地域の人たちも大勢かかわっているのが特徴です。

花壇づくり、運動会の児童席のテント設置など、校長先生がメールで協力をお願いけると、自分から「手伝いたい」と思う地域住民・保護者が集まってくる仕組みです。校舎の一面には「地域学校協働本部室」が設けられ、地域の人たちは好きな時にそこに集まり、コーヒーを飲みながら話をし、生徒たちの様子を見守っています。このような環境は、子どもたちにとっても、大変良いものではないでしょうか。

同PTCAの立役者である片桐常夫校長は、こう話します。「じゃんけん、くじ引きのPTAでは、保護者の人間関係がささんでいきますよね。つらい人に仕事を押し付けたり、陰で悪口を言い合ったり。大人がそんなことで、子どもたちが良くなるわけがないじゃないですか」。

本当にその通りだと思います。これまでのようなやり方のPTAはもう終わりにして、地域や保護者の自主的な力をうまく引き出すこのような組織が、全国にどんどん増えていくことを望みます。